

更級日記における「悔恨」

遠田 晤良

一
更級日記は、作者十三歳から五十二、三歳ごろまでの約四十年の回想記である。それはほとんど作者の全生涯ともいつてよい期間を俯瞰した回想である。一人の人間の生涯に統一的主題を求めることがおよそ困難であるように、全生涯にわたるこの日記に、統一的主題を求めることの難しさは、あるいは当然のことであるかもしれない。

しかし、実人生の雑多な体験は、回想の時点で選択され、限定され、あるいは潤色されて、再構成され、統一的主題のもとに整序されるはずのものである。日記という形で自叙形成を意図する場合時間的順序という制約が、統一的主題による構成をいっそう難しくするのではあるが、更級日記は特に構成力の弱さということが早くから指摘されてきた。

大養廉氏は「日記の構造を通観すると、家集的痕跡の濃厚な文段、紀行的・物語の乃至挿話的な纏りを示す文段が、それぞれ混在、内容文体とも未整理不統一の憾を逸れない」と指摘された。また杉谷

寿郎氏は「家集的章段の存在は日記を記念碑化する意図から出た歌稿のくりこみの結果でもあって、作品を十分に統一しきれなかった作者の構想力の弱さに、より重きをおいてこの現象を考えておきたい。ともかく更級日記は全篇統一された好箇の作品であるとは言いがたく、ことに大養廉氏指摘の日記の末尾形式などに問題が残ろう」と、構想力の弱さということを指摘されている。

更級日記が回想の指標、あるいは素材としてすでに作者の手許にあった家集乃至歌反古、紀行文、身辺雑記のごとき折々の手控えを整理編集し、補筆して統一を図ったものであろうことはほとんど疑いをいれない。これらの素材の未消化な繰り込みが、素材間の有機的統一をはばみ、未整理不統一と評されるのである。しかし「構成の破綻やその未定稿的性格を指摘する最近の動向は、古典美学の枯渴した様式美を過信する結果の言辞ではないか」といわれる菊田茂男氏の批判は、通念化された作品構造の把握、主題の読みさらに再考を促す重要な批判である。特に日記中五分の一の量を占める上洛の記の紀行の位置づけや、日記末尾の攔筆を思わせる終結の問題

などが解決されなければならないであろう。

拙稿「更級日記における嫉捨——主題をめぐる一視点」⁽⁴⁾は主題をめぐる問題を考察したものであったが、「悔恨の情」や不幸の意識を主題とするよりは、より深い虚無に浸された「慰むことなき生」の認識と、「救済なき人生」という暗く重い主題が存することを論じた。この稿は「悔恨」と最末尾の終結に論を及ぼし、前稿を継ぐ意図のものである。

二

更級日記の末尾に近く次のような述懐が布置され、作者の全生涯の軌跡を収束するものとして最も重視されて来た。

昔より、よしなき物語歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稻荷より賜ふ験の杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに稻荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢解きもあはせしかども、そのことは一つ叶はでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物の叶ふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ。(本文引用は、秋山虔氏校注「新潮日本古典集成・

更級日記」による。以下同)

作者はこの述懐において、①二つの悔恨を語り、②一つも夢の叶わなかった生涯を嘆き、③精神的依り所もなくさすらえる現在を自

虐的に語るのである。

悔恨の第一は、過去半生を「よしなき物語歌のことをのみ心に占め」てきた人生と概括し、一途な勤行に明け暮れる信仰厚い人生を送って来ていたならば、このような悲嘆を見ることもなかったものをと、もはやとり返すべくもない過去を悔やむものである。第二の悔恨は、かつて大嘗会の御禊を押して初瀬に参詣した折り、夢に験の杉を賜りながら、帰途稻荷に憬でることをしなかった迂濶さの故に夢告を生かしきれなかった愚かさを悔むものである。

一つも夢の叶わなかった嘆きは、夢解きが「あはせ」たという内宮仕えをなし帝后の恩寵を得るに至るといふ予兆が、そのかたはしすらも実現しなかったというのである。「天照御神を念じたてまつれ」という夢は、物語のことを夜昼分かず耽読していた少女時代のものである。「人にも語らず、なにとも思はでやみぬる」と回顧されていたが、これは少女の日からひそかに抱いて来た内裏宮仕えの夢というよりも、女としての幸福の象徴ともいふべきもので、そのような栄えばえしい幸運は「一つ叶はでやみぬ」といふ不幸感を吐露したものであろう。初瀬代参の僧が語り聞かせた「悲しげなりと見し鏡の影」が今の自分だという悲痛な感慨が「あはれに心憂し」と嘆息されるのである。こうした悔恨と不幸の確認が「かうのみ心に物の叶う方なうてやみぬる人なれば」という絶望的な自己確認となつて述懐されている。

作者を回想に誘う直接の動機はこの不幸感に発する。過去半生に不幸の原因を探ろうとするものである。これが回想の姿勢である。長いいはるかな回想の帰結が悔恨によってしか総括し得ない人生史を

確認させ、「かうのみ心に物の叶う方なうてやみぬる人」という自己確認に還るのである。不幸感⁶は堂々めぐりで出口がない。不幸から脱脚し再生をはかる姿勢はここにはない。そのために不幸の意識と悔恨が過去半生の回想の中に一筋の水脈をなし、あたかもそれが作品を統轄する主題であるかのごとく見なされて来た。「沈淪の身となつてはじめて自覚した不幸感と悔恨の情⁵」がこの作品の主題であると説かれた宮崎莊平氏の見解が代表的なものである。「不幸感が悔恨の情を誘発し、悔恨の情がいつそう不幸感を強調するといった構図」として、この堂々めぐりを重視された。

これに対してさらに宗教意識と東国原郷意識を重視された菊田茂男氏の「悔恨と別離による宗教意識の自覚と東国的なるものへの志向⁶」が主題であると措定された見解もあるが、私には、かつて西田禎元氏が「悔恨」を主題と見ることに疑問を呈された見解がより重い問題として意識される。「作者晩年の回想は確かに一抹の反省的言辞、悔恨ともとれる性格のものではあろうが、不思議なくらい生き生きと、若々しく記述されている。このことは、この作品が唯単に反省とか悔恨とかをテーマとしているということにはならず、憧れ、懐しみ、愛しさに似た心境をもっと重視すべきであることを示していると思われる」と氏は「悔恨」の情を主題とすることに疑問を呈された。

悔恨の念をもって否定されるはずの過去が「不思議なぐらい生き生き」と記されるこの日記の秘密を視野に収めることが主題論にとっても肝要のことであると考えるのである。

第一の悔恨「よしなき物語歌のことをのみ心に占めで、夜昼思ひ

ておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」と第二の悔恨「出でしままに稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし」と二段階に記される悔恨を吟味して、悔恨の情と不幸の意識を再考するところからこの問題の考察をはじめたい。

しばらく作者の悔恨の軌跡に眼を転ずるならば、第一の悔恨「よしなき物語歌のことをのみ心に占めで夜昼思ひておこなひをせましかば」というこの晩年の述懐が影を落している回想は

昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

という、作者十四歳、念願の源氏物語を入手耽読した時にさかのぼる。それは日記冒頭に「いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののおんなるを」と作者自身いぶかしみながら述懐するように、遠い上総での日々に胚胎し、上京の後にいやまさる、物語への憧れをようやく満たした頃のことである。作者晩年の心境から「まづいとはかなくあさまし」と嘆息されている。

ほとんど同じ頃、次のように記す。

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎ

りは、これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ、皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遺水をなむ造る」と言ふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言ふと見て、人にも語らず、なにも思はずやみぬる、いと言ふかひなし。このような物語耽溺の状態はなお続けられて、父孝標が常陸介に任官する作者二十五歳以前、それまでの生活を概観しての述懐に連つて、

かやうにそこはかなきことを思ひつづくるを役にて、物語をわづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられず、このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず、からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。

と回顧されている。

父孝標が願ひもむなく「はるかなる」常陸に任官した折りは、物語への思ひもややさめて、

花紅葉の思ひもみな忘れて、悲しく、いみじく思ひ嘆かるれど、
いかがはせむ。

ということであつたが、物語とのはつきりとした訣別は、宮仕えを経験し、意に反して親たちが宮仕えを退かせ、結婚させた直後の述懐にみることができる。

そののちは、なにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ忘られて、ものまめやかなるさまに心もなりはててぞ、などて多くの年月を、いたづらに臥し起きしに、おこなひも物語でもせざりけむ、このあらましごととても、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや、光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薫大将の宇治に隠し据ゑたまふべきもなき世なり、あなもののぐるほし、いかによしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず。

「まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず」という不徹底を悔やむことが添えられているが、まずは物語との訣別と見なされよう。この頃までの述懐に物語耽溺への悔恨は一筋の水脈をなしている。草深い上総での「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せ給へ」と祈った十三歳の頃から、宮仕えを経験し、そして結婚に至った頃までを含む、およそ三十三、四歳ごろまでの物語とのかかわりである。この半生の軌跡が「昔より、よしなき物語歌のことをのみ心にしめで、」と悔まれた「悔恨」の対象なのである。

周知のごとく「いまは昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て」た作者の後半生は、信仰に無関心であつたそれ以前の生活とは打って変つて、寺社詣に心を傾ける、人一倍熱心な信仰生活であつた。寛徳二年、作者三十八歳の石山参籠をはじめとして、鞍馬へ、初瀬へ、あるいは太奏へ、「身の病いと重くなりて、心にまかせて物語などせしこともえせずなりたれば」と記される四十歳頃を含めて、夫の死に直面するまでは、堅実な家庭の人であると同時に

に、世間普通の意味で信仰厚い、充足の歳月を重ねてきたとも見られるものであった。

前半生はこの中年期の信仰生活、堅実な主婦の生活を以ってしても償い得ない、苦い悔恨の対象なのであろうか。「よしなき物語歌のことをのみ心にしめで」という作者の言辭はまさにこの前半生に向けられたものである。

物語耽溺の生活を語るとき「法華經五の巻をとく習へ」との夢告、「天照御神を念じませ」という宗教的啓示が絶えず付記されることは、物語に明け暮れ物語と現実のけじめも忘れた作者にとって、物語耽溺の生活と宗教的生活とが対置されるものであり、信仰へのさとしが物語耽溺を戒るさとしであると意識されていたことを意味している。それは「識闔下から働きかけてくる」「狂言綺語的想念」とのせめぎあいと見ることもできよう。しかしここでは「よしなき物語をのみ心にしめで」という晩年の悔恨に対して、矛盾ない伏線としてみごとでさえあることを確かめるにとどめておきたい。晩年の心境が濃い翳を落としているという以上にみごとに符節を合わせている。

第二の悔恨が想起しているのは、永承元年作者三十九歳の折り、後冷泉天皇即位の年、大嘗会の御禊の日、「二代に一度の見物にて」という周囲の制止を振り切つて、初瀬に参詣した折りに連るものである。「物語のこともうちたえ忘られて、ものまめやかなるさまに心もなりはて」た結婚後の生活のことであり、「今は昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て」た自覚的信仰生活に入つてからのことである。

その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓へなどしてのぼる。三日さぶらひて、暁まかでむとて、うちねぶりたる夜さり、御堂の方より、「すは、稻荷より賜はる験の杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。

ここには山辺の寺での夢告と初瀬寺の夢告とが連続して記されている。晩年の悔恨に対応する悔恨めいたことはこの折りには記されなかったが、夢解きが判じたという「天照御神を念じたてまつれ」という夢が「人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど後の御かげにかくるべきさま」という予兆だったのに「一つ叶はでやみぬ」とした晩年の悲嘆に応じている。

第一の悔恨が、物語耽溺の前半生の信仰に無自覚であった自分の浅はかさに対する悔いであるのに対して、第二の悔恨は後半生の或る程度信仰に自覚的でありながら、なお不徹底であった自分の迂闊さに対する悔いであるといえる。第一の悔恨も、第二の悔恨もともに現在の不幸の因として、回想の帰結として意識されているのだが、第一の悔恨はいまさらせんすべもない遙かに遠い過去に向けられている。それに対して第二の悔恨は比較的現在に近く、しかも或る程

度信仰に目を開いた頃のことであり、わずかの努力で実現可能なものであっただけに、なまなましい現実性を持った悔いである。「よしなき物語歌のことをのみ心にしめ」た遠い昔に不幸の原因があるのだが、それがせんすべないものなら、せめて「出でしままに稲荷に詣で」てさえいたらという作者の心の動きからする二つの悔恨であるといえる。

これらには過去のすべてを否定しようとする自虐的なまでの悔恨の姿勢を見ることができるのであるが、では「かかる夢の世を見ずもやあらまし」、「かからずやあらまし」という「夢の世」と観する現実に対して、あり得たであろう現在とはいかなるものだったのか。当然それは夫の死によってもたらされた悲嘆の現実に対して、そうした悲嘆を味わわなくてはすむ現在であつたはずである。しかし、奇妙なことに、これらの悔恨は夫の死に対する悲嘆慟哭とは直接的につながりものではない。宮崎莊平氏が「夫の死にはかならずしも因果律はなく、仏教信仰が日常生活の多くの部面を支配していた当時にあつても、これは論理性を欠く、孝標女独特の思考方式である」とされたごとく、その限りではきわめて論理性を欠く思考であるとして評されねばならない。しばらく「いとかかる夢の世を見ずもやあらまし」という作者の不幸の意識に目を転ずることにする。

三

「かかる夢の世を見ずもやあらまし」という、あり得べきであつた現在が、もし「夜昼思ひておこなひをせましかば」という信仰厚い生活によって実現されるものならば、それは夫の死によって惑乱

絶望する現在の境地とは違った宗教的淨福の境地であるはずのものであり、いかなる信仰によつても避け得ない夫の死を受認し、いたずらに動揺絶望に乱されない宗教的悟入の境地こそが願われるのではない。

前節において確かめられたことは、晩年の回想の時点で作者が過去半生の自己の軌跡をほぼ二分して意識にのぼらせていることであつた。「物語」を軸心にすれば、物語耽溺の前半生と物語を脱した現実覚醒の後半生という対比であり、「信仰」を軸心にすれば、信仰に無自覚無関心であつた前半生と信仰に目覚めながらなお不徹底であつた後半生とである。

信仰に無自覚無関心であつたことへの悔恨の軌跡は前半生に次のように記されている。

①「後の位もなにかはせむ」と思うほど源氏物語を耽読した頃。夢にきよげなる僧が「法華経五の巻をとくならへ」ときとしたにもかかわらず、「人にも語らず、習はむとも思ひかけず」という無関心ぶりであつた。

②夢に皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水を作るといふ人から「天照御神を念じませ」ときとしがあつたにもかかわらず「人にも語らず、何とも思はでやみぬる」という無関心ぶりであつた。晩年の心境から「いといふかひなし」と嘆息されている。

③父が常陸介として東に下つた頃。清水に参籠したが「例のくせは、まことしかべいことも思ひ申されず」という無自覚ぶりだつた。そのために、参籠中の夢に、別当とおぼしい僧が「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と叱責すると

見たが、「かくなむ見えつるとも語らず、心に思ひとどめでまかでぬ」という無関心ぶりだった。

④母が一尺の鏡を鑄させて初瀬に代参に立てた僧が夢告として作者の未来に悲しき影とうれしき影の二つの道を示した時、「いかに見えけるぞとだに耳もとどめず」という無関心ぶりだった。

⑤天照御神を念じ申せという人があつた折「空の光を念じ申すべきにこそはなど、浮きておぼゆ」というように無自覚であつた。

⑥清水参籠の折、前生が仏師だったと夢告があつたのに、「清水にねむごろにまゐりつかうまつらましかば」おのづからようもやあらまし、いといふかひなく、詣でつかうまつることもなくてやみにき」という無自覚ぶりであつた。

こうして見れば信仰に無自覚無関心であつた前半生の心の軌跡が辿られる。しかし、これは作者が信仰に至る軌跡を語ろうとしたものではない。この日記は信仰開眼の心の軌跡を告白したものではない。それは、遙かな回想の起点を十三歳の少女の、上総での熱い物語憧憬の時に置いた一事をもつてしても明らかなことである。これから宗教的啓示に無自覚無関心であつた愚かな自己の姿も、それほどまでに深かった物語世界憧憬の深さを語る相対的な意味をしかか担っていないのである。「法華経五の巻」の女人成仏を啓示し、「ゆくさきのあはれならむもしらず」と警告し、「悲しげなりし鏡の影」を示す信仰勧奨の夢という「よしなしごと」へのいましめは、実は、いやおうなしに物語からの覚醒をせまる現実の返照なのであり、その意味では夢は現実と同義なのである。夢の警告に無自覚無関心な愚かさとして回想されている作者の姿勢は、実はいやおうなく憧憬

を浸蝕してくる現実に必死にあらがい、大切なものを守ろうとしていた少女期の姿にほかならないのである。あらましごとの愚かさにもかかわらず、一途な憧憬の美しさが感じられるのもそのためであろう。

彼女の物語憧憬は、草深い上総に生まれたが、そこでは都への憧憬と一体のものであつた。「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と等身の薬師仏に額づくのは物語世界への憧憬と都への憧憬が同義であり、仏はその夢をかなえてくれる力にほかならない。念願かなって上京の途につくのも「身を捨てて額をつき祈り申」した祈願の結果なのだといったげである。

上京の後、いやまさる物語への憧憬は自分の未来への夢想と一体である。「さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」と虚構の物語空間と現実とのあわいに、果てしない幻想を膨らませてゆく。それは浮舟夕顔という作中人物につつましく自らを擬している点で「奔放な無制限な空想でなかつた」し、「『幻想の現実性』の証⁽¹⁰⁾」というべき、自分の未来にひそかに期待した夢想であつた。

十八歳とおぼしい頃も「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ばそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」と少女の夢は色褪せるどころか「あらましごと」として強固に育まれていく。物語空間での幻想がそのまま生活

空間に浸透し、「あらましごと」として現実未来の生活を支配してゆくのである。仏への帰依も信仰も、「あらましごと」を実現させる力への祈念にはかならない。上総での少女期のあり方と少しも変るところはないのであり、それは物語幻想を脱した中年期以降も何ら変るところのないものである。近藤一氏が「日記全体を通じて宗教意識には何等の深化もない」と論じられた通りである。「あらましごと」とその喪失の軌跡にこそ作者の回想のまなざしは注がれている。作者が過去をほぼ二分して意識にのぼらせているであろうことは先述のごとくであるが、それではその分岐点はどこに見据えられているかという、それは作者の結婚であるとしなければならない。自叙を構成するこの日記が結婚について明瞭に記していないことはよく知られた事実である。

親たちもいと心得ず、ほどもなく籠め据ゑつ。

とあるのがわずかにそれと知られるばかりである。内的な精神の軌跡をたどる作者にとって、結婚という外的生活の変化は、内的変化に影響の少ない、言葉を費すに足らぬ些事だったのだろうか。「あらましごと」が未来に描き続けてきた恋物語的夢想である限り、結婚は決してささやかな事件ではない。極端に寡黙な叙述のありように、容易に内心を明かそうとしない彼女の結婚に対するわだかまりがあるろう。

いとよしなかりけるすずろ心にも、ことのほかにたがひぬる有様なりかし。

幾千たび水の田芹を摘みしかは

思ひしことのつゆもかなはぬ

とばかりひとりごたれてやみぬ。

という述懐は物語的幻想の延長線上に描き続けてきた「あらましごと」の夢が音たてて崩れていったことを物語る。寡黙な述懐に続く歌に夢を碎かれた失意がわびしく表白されている。重要な内心の真実を歌に託すこの姿勢は注意されなければならない。「よしなき物語」「歌」とみずから物語執心と同列に顧みた「歌」のこの日記における意味が他の部分、特に最末尾の日記終結の部分において注目されなければならない。「そのちは、なにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ忘れられて」と転換するこの結婚までが、物語憧憬の「あらましごと」に生きた半生との分岐点として作者にも意識されていた。

このあらましごととても、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや、光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薫大将の宇治に隠し据ゑたまふべきもなき世なり、あなもののぐるほし、

とは、否応なく浸触する現実から必死に守り抜いてきた幻想世界への訣別の言葉であり、「あらましごと」の敗北の宣言である。

それに続けて「いかによしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはてず。」と述懐が続くのは、後半生の生き方への悔恨である。失意の結婚を境いとして彼女の実生活は、折々の気ままな宮仕え、祐子内親王家への出仕と、家庭の主婦としての二つの生活の中にあつた。晩年の述懐の中に夢解きが判じたという乳母として帝寵を得る身の上との予兆をひそかに信じ続けていたということは一つの驚きであるが、気ままと見えた

時々の出仕の中でそうした想念を抱くこともあったのかもしれない。既婚者の出仕であつてみれば「乳母して」という想念は、祐子内親家出仕の間に見続けていた夢であつても不思議はない。極度に物語化された資通との出会いなども、その頃の夢の形見と見れば、それをいとおしむ回想の眼差しに納得がいく。

家庭の人として

今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことを思はむと思ひはげみて

と述懐するのは、露悪的なほどに世俗的な衣裳をまとっているが、主婦としての生活に抱いた夢であるにすぎない。

結婚によって物語的幻想世界を脱した彼女は、結局は失なわれた夢に新たな夢を置き換えたにすぎない。その意味では彼女は晩年に至るまで物語的幻想空間を脱しきれなかったのであり、物語の夢潰え現実に覚醒したともいわれる生活のこれが実態なのである。夢想的な人生認識は変ることがなかった。大嘗会の御禊を押してのものぐろおしいまでの初瀬参詣も、娘時代の「あらましごと」を必死に守ろうとして夢告に耳を貸さぬ態度の相反にすぎない。しかしそれが愚かだというのではない。人は多かれ少なかれ、夢に夢を継いで生きるものであるし、たえて実現されることのない夢の堆積が、平凡なる人生というものだろうから。

晩年にさしかかつての夫の死はこうした夢を根こそぎ覆すものであった。不幸の意識はこうした夢の喪失感にもとづき、夫を亡った悲運の人であるという事実を超えて、はるかに根深いものである。

夫の死という衝撃を契機に自覚された、夢破れた「宿運のつたなさ」が不幸の意識となり過去の生き方への悔恨を呼びさます。不幸の意識と悔恨の堂々めぐりの果てに深い喪失感と絶望感が漂うのも当然である。「かうのみ心にもものかなう方なつてやみぬる人」という自己確認が苦く重い。

しかし、この日記がこうした心境の時点で書かれたとすることはできない。不幸の意識と悔恨の果てしない堂々めぐりから脱するのは、やはり夢によつてである。天喜三年十月十三日と年号月日も正確な記憶の中にある阿弥陀仏来迎の夢である。「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」と述懐するように。回想の中から探り当てた唯一の救いである。夫存生中のいわば古い夢であるが回想の中から探り当てた大切な夢告としてここに記すとき彼女はたしかに救われたのである。

しかし、限らない不幸の意識から回想した四十年の人生史は、現実によつてそむかれ、潰え去つた夢の歴史であつた。過去半生を喪失の人生と認識した彼女はいままた一つの夢を紡ごうとしている自分を見出し、その夢もまたはかないものであることを知らねばならない。弥陀来迎の夢も失われた夢と変らぬ「あらましごと」にすぎないのである。弥陀来迎の夢によつても救われない自分を見出すしかないのである。彼女が宗教的救済を信じていたなら日記する営みはあり得なかつたろうという諸家の指摘はその通りであろう。秋山虔氏が「敢えて作者の救済について言うならば、この夢について言及しつつも、なお絶望的な前途に淪んでいかねばならない自己の人生を、その由来するところをも透視して、統一的な構図に領取す

る當為、すなわち『更級日記』の著述という主体的行為そのものに、それが見いだされるといえよう⁽¹²⁾と言われたように日記する行為は信仰による宗教的救済を、むしろ拒むものといつてよい。また日記するという「行為の果てに救済がもたらされるはずもないのは、それが一般に文学というものの業」として納得できることである。

しかし、作者が自らの人生史を綴ることによって「かうのみにもののかう方なうてやみぬる人」と総括することができた時、「なお絶望的な前途に淪んで」いかなければならなかったかは疑問である。「かうのみにもののかう方なうてやみぬる人」という自己規定は、「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」というはるかな冒頭に応ずるものであり、「功德も作らずなどしてただよふ」現実には、日記する行為をも含めた自分が見つめられていくはずだからである。

四、

天喜三年の夢に続く日記最末尾は、弥陀来迎の救済にもかかわらず孤独な悲嘆に沈淪する晩年の悔恨の総括とみる見方からすれば、蛇足のごとくにも見られ、また老残の孤愁を表わすのみとも受けとられて来た。しかし内心の真実を歌に託すこの日記の姿勢を重視すれば、この終結部はなお立ち入って考察されなければならないであろう。

第一首目は夫の死後、訪れるものとてなく、孤独な境涯となった作者が甥の訪問に対して詠じたものである。

月も出でて闇にくれたる姨捨に

なにとて今宵たづね来つらむ

夫を失つて悲嘆にくれる姨捨山に捨てられた姨のように誰からも見捨てられた我身と孤独な自分を甥に訴えているのであるが、「闇にくれたる姨捨」という自己規定は考えさせるものがある。周知のごとくこの歌は古今集雑上「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」に依拠する。また大和物語等の姨捨伝説を念頭にしたものとも解される。作者が姨捨伝説の姨とわが身を観ずるような境遇や心境にあったことは詞書の部分からも知られるが、この歌は古今歌に依拠する歌の伝統に照らして、⁽¹³⁾「姨捨」が「慰めかねる心境」を象徴するものとして読まれねばならない。

「闇にくれたる姨捨」とは、夫の死による悲嘆に打ちひしがれた我が身であるとともに、夫への思いに「慰めかねる」心を抱いた我が身でもあろう。「わが心慰めかね」て身を姨捨てと観ずる作者の思いとはどんなものだろう。長い回想の果てにこの歌を配置したことは、単なる孤独な境涯に対する嘆きだけではないものが籠められているよう。夫への思いに「慰めかね」る心とは、過去の自分の一方的な夢想の故に共感乏しい夫婦であらねばならなかった愚かさを悔ゆる思いではなからうか。

この歌が日記題号と深くかわるものであることは定説化している。玉井幸助氏がいわれるごとく⁽¹⁴⁾、もし信濃守で没した夫を偲ぶ心といかほどかわりがあるとすれば、愚かさを悔む悔恨の思いが題号にも響いているともいえる。恣意的な臆測はつしまねばならぬが、日記末尾は決して蛇足ではない。

三首目に年次不明だが夫の命日の頃の詠として

ひまもなき涙にくもる心にも

明かしと見ゆる月の影かな

という詠がある。「ひまもなき涙にくもる心」は当然夫の死以来その悲嘆のために晴れることのないわが心を用いのであるが、長い回想の果てに据えられることは、夫の死を包み込んだわが身の宿運のつたなさに涙し、悔恨に涙する心ともいえる。その時悔恨をもって否定したはずの過去がなお飽かじ（明かし）と思われる憧憬の輝きを帯びる心の秘密が明かされているようである。日記執筆時点はこのような心境の時でなければならぬであろう。悔恨の涙に曇る心に遙か上総の地で都への、物語への純粋な憧憬に満たされていた日が美しくよみがえる。澄んだ月を眺めれば上洛の途次のくろとの浜の月も、乳母との別離の空の悲しげな月も、姉と語らった夜半の十三夜の月も、同じ光に包まれて輝きを増すであろう。

卷末は次の贈答一対で閉じられる。

茂りゆく蓬が露にそぼちつつ

人に訪はれぬ音をのみぞ泣く

尼なる人なり。

世のつねの宿の蓬を思ひやれ

そむきはてたる庭の草むら

作者の贈歌はまたしても孤独をかこち寂しさに涙する心境である。卷末にこの一対を配するのは救いのない老残の思いに沈淪する自画像ともとれる。しかし答歌を「尼なる人なり」と特に記す点に注目する。答歌は慰めの歌である。尼なる人の心境に対比して「功德もつくらずなどしてただよふ」自分の境涯をきわだたせる暗示的

手法かとも見られる。しかし尼なる人の深い寂寥感の表白はどうであろう。「夜昼思ひておこなひ」をする尼なる人にしてこの寂寥感である。いかなる境涯に身を置いても逃れることのできない人生の寂寥を暗示しているのではなからうか。おびただしい涙の後に作者はそうした人生の寂寥を見つめているのである。

虚妄の夢として悔恨をもって否定したはずの過去が生き生きと光彩に満ちているのは日記末尾の詠歌が示す心境の下で日記は執筆され、詠歌が潜めた心境に染められているからにほかならない。晩年の悔恨のみが回想の総括ではない。悔恨の果てに作者が見ているものは、あり得たであろうもう一つの人生ではなく、存在の根源から送られてくる人生の寂寥と諦念によって懐しく愛しくよみがえる、夢に生きた人生である。それは姨捨山の月のように輝いていなかったらうか。

(五六、二)

注 (1) 大養廉氏「更級日記臆断」『国語文研究』昭35・10。

(2) 杉谷寿郎氏「更科日記の構造」『語文』昭47・3。

(3) 菊田茂男氏「更級日記——主題把握」『国文学』昭45・7。

(4) 「更級日記における姨捨——主題をめぐる一視点」『札幌大学教養部・女子短大部紀要』昭54・9。

(5) 宮崎莊平氏「更級日記の構造、一、作品の主題と構造」『平安女流日記文学の研究』笠間書院、昭47・10。

(6) 注(3)に同じ

(7) 西田禎元氏「『更級日記』における『源氏物語』享受の問題——夕顔思慕をめぐる」『創価大学文学部論集』昭47・11。

(8) 菊田茂男氏「物語幻想の崩落——源氏物語の邂逅と離脱」『国文学』

昭56・1。

- (9) 宮崎莊平氏「更級日記の作品論補説」『藤女子大國文学雑誌』昭52・4。
- (10) 犬養廉氏「孝標女に関する試論——主としてその中年期をめぐって」『国語と国文学』昭30・1。
- (11) 近藤一一氏「更級日記の再吟味——その宗教意識について」『日本文学研究』昭24・8。
- (12) たとえば秋山虔氏新潮日本古典集成『更級日記』解説
- (13) 拙稿前掲注(4)においてこの問題を論じたのでここでは論証を省く。
- (14) 玉井幸助氏校注日本古典全書『更級日記』解説